No.116
2023.1月1日発行

人生を3回楽しむ

オルバイオ株式会社 代表取締役CEO
京都大学名誉教授

山口 栄一 氏（高校25期）

1973年立川高校を卒業し、同年東京大学理科II類入学
1977年東京大学理学部物理学科卒業、1979年同大学院修士修了
1984年理学博士（東京大学）
1979年よりNTT基礎研究所にて物性物理学の研究をし、1999年より経団連21世紀政策研究所
2003年より同志社大学教授、2014年より京都大学教授。2020年に京都大学を定年退職し、
オルバイオ株式会社を創業、代表取締役CEO

福岡に生まれ育ったぼくは、中学3年の時に母を肝臓がんで亡くし、心配した父が東京に移り住むことを決意して、高校1年の夏の終わりに立高に転校してきました。悲しげにしていたぼくのことを、小川雅夫くんや林高史くん、高橋恒ちゃん、亀山義範、中村信一郎、そして阿山みよしさんらが気にかけてくれ、ぼくは少しずつ立ち直っていったことを、柔らかい懐かしさをもって思い出します。

やはり寂しい少年だったアイザック・ニュートンにあこがれていたぼくは、物理学科に進学し、理学博士号を取って20年間心から物理学の研究を楽しみました。どんな研究をしたか、ご興味があれば 右のQRコードからご覧ください。

←加速器を用いて、半導体にイオン注入をしているところ（28歳, 1983年）

クライオスタットで、半導体を—270度まで冷やし、量子効果を観測しているところ→
（29歳, 1984年, 博士論文の研究）

クレイ-1を操作して量子力学計算をしているところ。（31歳, 1986年）

ところがフランスの研究所に招待されて3年余り南仏コートダジュール暮らしをしていた20世紀の終わりころ、日本で「大企業中央研究所の時代の終焉」と呼ばれる大事件が起きました。日本の大企業がいっせいに研究から手を引いたのです。日本のイノベーションは企業が生き生きと研究をしているから成立している。もしもここで企業が研究を止めたら20年後の日本は亡国の危機を迎える（ぼくの予言は残念ながら的中しました）。そう思ったぼくは、後ろ髪をひかれながら日本に帰国します。そして物理学研究を止めて文転し、イノベーション論の研究に転じました。それから同志社大学ビジネススクール教授やケンブリッジ大学客員フェロー、そして京都大学総合生存学館教授として、日本のイノベーション再生の研究を20年間行ってきました。

2020年京都大学を定年退職したので、ぼくはようやく自分がつくったイノベーション論を実践するチャンスに恵まれました。そこで、「Lグルコースはがんのみが食べる」という驚くべき事実に基づいて、ぼくたちが見つけたまったく新しいがん征圧の方法を社会に届けるために、ベンチャー企業、オルバイオ株式会社（https://orbio.jp）を起業したのです。ここで創った新しいトロイの木馬型「分子素子」は、母を殺した肝臓がんやぼくをむしばむ前立腺がんはもちろん、悲惨な膵臓がんや卵巣がん、肉腫なども退治し完治させることができます。

フランスの研究所で、常温核融合の研究をしているところ（39歳、1994年）

京都大学時計台ホールにて最終講義
（65歳, 2021年1月）

思えば、ぼくの人生は20年ごとに3回、まったく異なることをなしてきた「ひつまぶし」人生でした。そんな人生のあり方を教えてくれたのは、中村信一郎でした。かれは若くして亡くなりましたが、今でもぼくのすぐ後ろにいて、「山口まだまだだぜ」と言ってくれているようです。